
紅い華

桂樹 槐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅い華

【Zコード】

N9723C

【作者名】

桂樹 槐

【あらすじ】

あかさき いりは

塗鶯伊里葉は毎日のように夢を見ていた。最初はその夢に何の疑問も抱かなかつたのに、成長するにつれてリアルになつていく夢に、ある疑問を覚える。既視感夢で見たことが、次第に現実でおきるようになつっていくのだった。

紅い華* プロローグ

ぱた、ぱた……ぱたつ

紅い華が、純白の雪を彩る。

夢だ

瞬時に悟つた。

それなのに、生暖かいその感覚だけは、如実に伝わつてくる。

夢だ

そう、自分に言い聞かせた。

大丈夫、きっと、朝になれば日が覚めるから。

第一話*過去回想

そう、確かに私は同じような夢を幾度となく、幼い頃から見続けてた。

周りは、夢の続きを視たいのに見れないと嘆いていたのに、私の夢は必ず続いていた。

一番最初に見た夢は、綺麗な、純白の雪原。

その次の日に、そこに木々が幾本か生えているのがわかつた。
最初に夢を見始めた日から五日目、夢は過去へとさかのぼっている
ように感じられた。

何故なら、そこに登場する人物達が、

そう……高校生だったのが小学生くらいになっていたから。
そのとき私は、まだ幼稚園の年長だった。

何故私にそんな幼いときの記憶があるのか、それは私にもわからなかつた。

しかし、私には夢を見始めた日以前の記憶がない。

おぼろげにも覚えているだろう、そんなものさえも微塵としてなかつた。

ある人は、『写真を見ればある程度は思い出せると』言つ。
しかし私にはそれさえもなかつた。

両親が語る、私の年長よりも前の思い出話は、
私にとっては他人事以外の何物でもなかつたのだ。

そして私は、それを悲しんだことは一度としてなかつた。

決定的だったのは、小学校五年生の春の夢。

ぬるりとした嫌な感触が腕いっぱいに広がっていた。

それが何かはわからなくて、気持ちが悪いのにどうすることも出来ない。

夢の中では、自分の意志で動くことさえ出来なかつたのだ。
そして、その頃に気づいた。

私は、夢で見た景色を、一度一年後に現実でも見ている、ところと。

高校生になつた今、私は夢の中でも、少しならば自分の力で動けるようになつた。

そして、ぬるりとしたあの嫌な感触が、何者かの血であることをわかつた。
でも、一つだけわからない。

この場面だけは、どれだけ時間がたつても、現実になることはなかつたのだ。

そして、この夢だけは、繰り返し、繰り返し……何度も繰り返して見てしまう、その理由が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9723c/>

紅い華

2010年10月26日04時57分発行